

全体会Ⅱ 指導助言記録要約

県総合教育センター特別支援教育研修課 山之口 和孝 研究主事

【本校の取組について】

- ・ 元々設定されていた自立活動反省をベースにしなが、他の学習活動についても取り扱う拡大クラス研修に発展させて取り組んでいる。今あるものをベースにマイナーチェンジさせることで、負担感が小さい状態で研究に取り組むことができている。
- ・ 縦の発達、横の発達どちらも大切であるが、横の発達を遂げていくことで蓄えられた力がエネルギー源となって縦の発達を遂げていくことになる。障害のある児童生徒、特に重度重複障害児の成長発達には時間が掛かり、同じ状態に見えていても、実は成長発達しているといえるくらい微々たる変化である場合が多い。そのような重度・重複障害のある児童生徒の変容を複数の目でかつ、重複学級の担当と訪問教育の担当で見取るという取組は素晴らしい。
- ・ 小規模校は児童生徒一人一人に手厚く対応しやすく、教師間の意思疎通を図りやすい。大規模校は教員の数も多く広い分野で専門性の高い教師がたくさんいるが、みんなが集まって児童生徒一人一人のケースに時間を掛けて話し合うのは難しい。しかし、学校の規模によって学部単位、学年単位で活用することができるのではないかと。標準、重複、訪問のメンバーをシャッフルしたり、訪問の児童生徒の様子を標準の教師にも見てもらい支援の手立てを一緒に考えたりすることが、間違いなく児童生徒の実態に即した指導支援方法の充実や教師の授業力の向上につながる。

【自活と教科の関係、目標設定、評価から効果的な会の進め方】

- ・ 教科については、身に付けたい資質能力、見方考え方を働かせながら身に付けていくよう、観点に基づいて目標設定－自己評価をしていく形で進め、各教科等を合わせた指導で教えるか、教科で教えるかを決定し、目標設定－授業－評価という流れとなる。
- ・ 自立活動については、障害のある児童生徒が障害による困難さがあるために、教科での学びや各教科等を合わせた指導の学び等、なかなか身に付けることが難しい。その困難さを改善、克服していくアプローチ、それに対して目標を設定していくのが自立活動である。自立活動と教科の異なる部分を整理することで、それぞれの目標設定、活動設定ができてくる。重複障害の場合は、教育課程上各教科を自立活動に置き換えることもできる。教育課程編成の際、教科で扱うか、自立活動に置き換えるか、合わせた指導にするか等を教師が工夫していると思う。
- ・ 広島県福山特別支援学校の取り組みとしてアセスメントのチェックリストがあり、主に国語、算数の授業内容、学習内容等が整理されていて、それに関する教材教具、姿勢支援の方法、認知コミュニケーション指導等ホームページで公開している。
- ・ 目標設定の難しさに関しては、定型文の形にするのも一つの考え方である。例えば、「顔を上げて対象物を見ることができるようにするために、教師が支える言葉掛けをしながら支えることで、教材を注視することができる。」という形にすると、誰が見ても見やすく、評価基準の設定もしやすくなる。

【グループウェアの活用の工夫】

- ・ 児童生徒が複数になればなるほど共有する時間の確保が難しいという課題において、略案をグーグルのスプレッドシートにして、ニーズに応じて確認したいもの、授業の様子や学んでいた様子、有効だった手立て等を横に項目で付ける方法がある。スプレッドシートはいつでも誰でも編集、記入することができ、同時編集もできる。話し合う材料が揃っているので、効果的に会を進めることができる。回覧で取り組んでいる学校もあり、確実にその先生が見たことが分かるという良さがある。
- ・ 授業の動画をグーグルドライブに共有フォルダを作り、スプレッドシートや討議の形にするなら、ジャムボードをワークシートの形にして付箋の色を決めておき、気付いたときに書き込んでおく等、事前準備を工夫することで改善できる部分もある。

【紹介】

「ポランの広場」島根大学総合理工学研究科の主宰サイト
「Eye Mot (アイモット)」重度障害児・者の支援アプリ
「重複障害教育ハンドブック」県総合教育センターHP (R4.5 更新)

